

伊勢国国人愛洲氏について

若干の史料の検討

稲本紀昭

はじめに

愛洲氏については、その出自、系譜を始め本拠地、滅亡の原因・時期等の不詳な事が余りに多く、そのため諸説紛々、伝説・伝承も加わって、徒らに南朝忠臣愛洲氏像が肥大化しているのが現状である。その中であって、中世古祥道氏の労作『伊勢愛洲氏の研究』は、伝説を排し、確かな史料に拠って愛洲氏の実像に迫ろうとした唯一の著作といつてよい。愛洲氏関係史料は氏の著書に多く引用されているところであるが、若干の遺漏もあるのでこの小論では、可能な限り関係史料を収取し考察を加え、愛洲氏の実像に迫りたいと考える。なお、出自・系譜については現存の史料からではその追求はあまり生産的な営為とは思えないので、一切省略した。また、同族と思われる紀伊愛洲氏についても考察の対象とはしなかった。史料を見る限り、両者は同族であっても領主的発展は全く別箇に行われたと考えられるからである。

以下関係史料を掲出する。

○『太平記』は岩波古典文学大系本による。(巻数・頁も)

○『氏経引付』は一六巻は自筆本(京都大学国史研究室架蔵写真版)による。『氏経引付』上・下は東京大学史料編纂所蔵写本による。

【史料】

〔太平記〕

(イ) Ⅱ巻四九頁、建武二年十一月「節度使下向事」
(一三三五)

○「愛曾伊勢三郎」(新田義貞に従う「他家大名」中にあり。)

(ロ) Ⅱ巻五四頁、同年同月、「矢矧・鷲坂・赤越河原闘事」

○「宇都宮、仁科、愛曾伊勢守」(義貞軍団を構成。)

(ハ) Ⅱ巻五九頁、同年十二月、「箱根竹下合戦事」

○「千葉、宇都宮……愛曾」(義貞軍団を構成。)

(ニ) Ⅱ巻二〇四頁、建武三年七月、「江州軍事」

○「今ハ君ノ御憑有ケル方トテハ、……伊勢ノ愛洲が当国ノ敵ヲ退治シテ、江州ヘ発向スベシト注進シタリシ計也」

(ホ) Ⅲ巻一二五頁、観応二年二月、「光明寺合戦事」
(一三五二)

○「去程ニ、八幡ヨリ石塔(頼房)右馬権頭ヲ大将ニテ、愛曾伊勢守、矢野遠江守以下五千余騎ニテ書写坂本ヘ寄ントテ……」

○「伊勢ノ愛曾が召仕ヒケル童一人、俄ニ物ニ狂テ、吾ニ伊勢太神宮

乗居サセ給ヒテ、此城守護ノ為ニ……」

〔難太平記〕

○相返手より伊勢国あいそと云大力の者、只一騎うしろより来けるを………後(今川範国)に故殿家人殿村平三(ママ)とものと云者、あいそが知音にて……

(後略)

1. 「本問文書」(東京大学史料編纂所蔵、影写本)

○伊勢国朝明郡小向・金綱一分地頭本問四郎衛門代田嶋二郎右衛門尉貞国軍忠事、今月二日朝敵北畠源少将、堀川相掌(ママ)、棚橋大納言僧都(隆經)、愛曾六郎左衛門尉、一福大夫、雅楽入道以下凶徒等、率数千騎、寄来大口浜并法田・立里繩手之間、於中手、太田藤四郎、稻垣大隅三郎相共、致軍忠畢、此上者且預御注進、且為後証、賜御証判、弥為抽無二軍忠、言上如件

建武四年四月六日

(吉見氏頼カ)
「承了」
(花押)

2. 「二階堂文書」(『大日本史料』六一四)

○伊勢国朝明郡萱生御厨地頭職六郎入愛洲三郎左衛門尉宗実、為勲功賞、可令知行者、天氣如此、悉之以伏、

(一三三九)
延元四年四月五日 左中弁頼マ

3. 「諸家所蔵文書」四、(『大日本史料』六一五)

○ 潮田刑部左衛門尉幹景謹申軍忠事

右幹景、雖為不肖老骨身、奉属当御手、度々抽軍忠之上、自去年十二月、循籠神山城、致昼夜警固之处、去八月廿八日、高士(師秋)左守以下国中凶徒等、抽寄当城、打困四方、攻戰之刻、幹景自八月廿八日、至于九月十日、終日終夜、於方々陣々、捨身致防戰之忠、追返賊徒等之条、藤原大膳亮、并同所合戰軍勢等所令存知也、次同十一日、於立利繩手、抽軍忠之条、守護愛州太郎右衛門尉、鹿海一福大夫并軍勢令見知畢、然早下賜御証判、且備後代龜鏡、弥欲竭忠節矣、仍言上如件

延元四年九月日

(以下裏書)

合戰之次第無相違候、

大膳亮伴兼隆(花押)
(一福大夫)
内宮権祢宜興時(花押)

4. 神宮文庫蔵「貞治本宮別宮及外宮遷宮大畧」紙背文書、(『南山遺芳』所収)

○「候(前欠)す候」此辺神人発向事も先代未聞事候間、適御方へ愛洲退治にて、成宮方科かと覚候、塔世陣事、今于者京都などへ打入責候て世上乱候者、引候はん、無其儀者、不可退候由聞候、如此事、難悉伏

中候、期便宜之時候也、恐々謹言
(年不詳)
十月六日

為仲

5. 『醍醐寺文書』(『莊園志料』上所収)

端書
○一愛洲請文 曾祢庄事

醍醐寺領伊勢国曾祢庄預所職事、被仰付於幸松丸之間、御年貢以下之事、幸松丸之請文一通進上之候、若致未進不法候ハ、時房可明申候、以此旨可有御披露候哉、恐惶謹言

(觀応二)
(四月廿六日 左衛門權少尉時房(花押)
(一三五二)

6. 神宮文庫蔵「御鎮座伝記」紙背文書

○ 注進

任守護方去年書下、依庁宣、当国神領之内祢宜貞□由緒相伝御贄上分口入料対捍所々且注進之

合

(前略)、多氣・度会兩郡所在丹河御厨者、(略)延喜供進建立之地也、(略)日光僧正房・愛須押領、今又雅樂入道并宗□、中村葉師兵衛以下族押領知行、(中略)、

滝野御厨上分口入料、新地頭五ヶ七郎左衛門尉押領之間、不及神稅運上者也、

飯高郡苦木御園一名号 愛須押領之間、不及神稅也、(後略)

(一三五七)
延文二年二月 日

7. 『醍醐寺文書』四一八一五

○伊勢国棚橋法楽寺領、同国河田散在、繩主戸・古利寺等事、致神人并愛洲一族等押妨云々、不日止彼妨、可被沙汰付三宝院雜掌之状如件

(一三九九)
応永六年四月三日

(足利義満)
御判

(顯泰)
北畠大納言入道殿

8. 田中忠三郎氏蔵「釈尊寺手継案」

○(端裏)
「内々為御心得案文如此」

勢州ニ大神宮法楽寺とて醍醐之御末寺候、寺領等愛洲一族并神人土一揆等押領候、鹿園院殿御判下候、国司方へ嚴密ニ被申付候て給候者、可為御 神忠候、右所書之一ハ、可為御祈禱由趣、被仰付候者、何之煩あるましく存候、神領中之事者、祭主ニ堅可被仰付候、恐々

(草名)
(応永六年力)

9. 右同文書

○当寺末寺廿四寺目錄

(中略)

古利寺 五ヶ瀬押領

(以下略)

10 「醍醐寺三宝院文書」(東京大学史料編纂所写真版)

○先度令申候棚橋領之事、早々渡給候者、可喜入候、并愛洲之内瀬押領在所之事、同可被仰付候、^{なわぬし}繩主戸、草庭、^{やいせ}矢瀬是三ヶ所まで候、何もく門跡領事ニ候へハ無御等閑候者可悦入候趣、被仰出候者可畏入候、

(年月日不詳)

11 『氏経神事記』 ^(一四四一) 永享十三年十二月二十二日条

○龍原祭礼、七神主雖為巡番、違例館ニモ不参間、自長官可被進代官、為先例之处、無其沙汰、但去九月、六神主被参候時、三瀬方松倉藤兵衛ニ有意根義間、彼者可奉取替之由申、六神主押留、然之間、五ヶ方令籌策無相違下向之事、未落居歟、云彼云は無参勤、

12 自筆本『氏経引付』六

^(一四四二) 嘉吉三年

太神宮御領伊勢国華台寺領事、為菊御園内宮御餼料所、無懈怠被勤仕上者、於当方不可有異儀候、就中内宮祈禱事、一向奉憑候。恐々

謹言

十二月廿四日

景雅判

内宮浦田殿進之

五ヶ駿河守

(参考)同書所収

a きくの御そのけ大寺の分、一ちやう四反畠半、此分神宮のつか井方へねんくをとりわたさるへく候、委細者、これにて仰らるへく候、あなかしく

十一月二日

うきやうの進判

□□ ゑもん殿

馬助判

b きくの御そのけ大寺分九反二丈にて候、此ふん神宮つかい方へ年貢とりわたさるへく候、いさいハこれにておほせらるへく候、あなかしく

十一月二日

うきやうの進判

^(たのい) (田辺か)ゑもん五郎殿 右馬助判

13 『氏経神事記』 ^(一四五一) 宝徳三年十月十九日条

○両門氏寺領事、野篠郷給主五ヶ所方へ被成庁宣、加判

14 自筆本『氏経引付』二

○三郡内神税徴納注文

(前略)

一、同池村御園十二月十五日御贄上分米一石、柑子三百、籠物二、

五ヶ方押領、此三ヶ所(注飯野郡小黒田御園、多氣郡前野四ヶ里)

当宮政所神役在所(後略)

(一四五三)
享徳二年十一月 日

15 自筆本『氏経引付』五

○久御在陣御祈禱千度御被太麻進之候、兼又太神宮二門氏寺田宮寺事、致天下御祈禱嚴重大伽藍候、仍寺領以下事御免之在所候、御成敗之内、寺領無相違、遂徴納、可專御供燈明勤行間、預御成敗候者、所

仰候併可為御祈禱候、恐々謹言

(寛正六年・一四六五)
十一月廿四日

氏経

五ヶ所殿

16 自筆本『氏経引付』五

○御状委細拜見申候、兼又田宮寺々領事、我等力領内候、伏候分如此間、相違あるましく候、乍去、自別当方被申、無子細候間、如何と存候、仍千度御被送給候、目出度候、諸事期後信時候、恐々謹言

(寛正六)

忠氏判

十一月廿六日

一称宜殿

御返報

五ヶ所三河守

17 『内宮年中神役下行記』

○一、七ヶ御園、本郷田口ハ御台料所、(略)六月上宮幣使米三斗、

人夫進、但近年国方押領、五ヶ所一円ニ知行、仍不法之間、高師之上分ヲ被付

18 『氏経神事記』(一四六六)
応仁二年六月廿二日条

○野原郷当時愛洲押領間、人夫、幣使米不進、仍高師上分ヲ六月幣使米ニ被定、然而近年国念劇ニ無沙汰、仍悉以私力參勤

19 自筆本『氏経引付』六

○一、目安

皇太神宮祢宜經興維掌定満謹言上

欲早任先例理運、被成連署御庁宣、華台寺領菊御園、全知行專神役動問事、

副進

五ヶ駿河守書状、代官渡状等

右件御園者、為太神宮御領、毎年九月九日奉備菊花御饌嚴重神領也、然依坂内殿様依為御知行領之内、以五ヶ駿河守方、去嘉吉三年、申上子細之刻、依為本神領、被返付、御代官渡状并五ヶ駿河守方書状等如此、仍干今全知行、奉備御饌之處、去年、自五ヶ方被押神稅

之間、不及御饌供進之条、神慮難測者也、然早任先例理運、以連署御庁宣被申坂内殿様、全徵納、為專神役勤、謹言上如件

応仁二年十月廿八日

20 自筆本『氏経引付』六

○庁宣

可早任先例、遂徵納、專式日神役、華合寺領菊御蘭事

副進

雜掌解并書狀渡状等

右件御蘭者、為 太神宮御領、毎年九月九日奉備菊花御饌嚴重神領也、然去年依五ヶ方妨、御饌不動之条、神慮難測者哉、子細雜掌解具也、然早任先例理運、蒙御成敗、全徵納、為專神役勤、所宣如件、以宣

応仁二年閏十月一日

祢宣荒木田神主判 十人加判

21 『内宮引付』

○一、目安

皇太神宮祢宣經興雜掌定満謹言上

(以下、史料19ト異ナル箇所ノミ掲出)

自去応仁元年、五箇方被押領神税之間、不及御饌供進之条、神慮難測者哉、爰五箇方背上意、被失其身之条、尊神御訝歴然者哉、(略)
(一四七三)
文明五年八月日

22 『内宮引付』

○庁宣

(以下、史料20ト異ナル箇所ノミ掲出)

自去応仁元年依五箇妨、御饌令退転、仍神慮不快之儀、令顕然者哉、

(略)

文明五年八月日

(ママ)
目安不留案

祢宣荒木田神主判

十人

23 『氏経引付』上

○就東泉坊公事、氏神役田四杖事、可致落召之由、祝注進仕候、驚入候、此下地者、異干他神田事候、曾非東泉坊私領候、若相違之儀候者、氏神之神事可退転候之条、神慮難測、被止御綺候者、可為御祈禱專一候、仍干度御拔太麻一合進之候、恐々謹言

(文明九年)
九月八日

氏経判

愛洲殿

内宮一神主

24 『氏經引付』上

○ 尚々申候、御被太麻給候、祝着申候、此方御用可承候

御札委細令存知候、抑於山神東漸坊住持、同山田坊を請取候、仍東漸坊を内城田長原良順と申法師ニ可出約束仕候哉、其後良順ハ彼東漸坊可請取由申候、又東漸坊ハ不致約束由申候之間、兩方及相論候然間、兩人之申事、致糺明候て、任理非、可致成敗由申付候、未一段無成敗之儀候、彼寺領之内、神田候をも、我等不存知候処、彼田四杖可召落由、注進申と承候、言語道断子細候、此由能々可有御心得候、折節取乱候て不能巨細候、恐々謹言
(文明九年九月十一日)

愛洲伊与守忠行判

内宮一棟宜殿

御返報

25 『氏經引付』上

○ 太神宮祢宜祠官氏寺田宮寺領矢野内供僧田五供事、近年依被落召、勤行令退転之条、云神慮、云冥慮、以無勿跡候、如元被返付候者、可為御祈禱專一候、就其別而可抽祈念精誠候、恐々謹言
(文明九年十月十八日)

氏經判

愛洲伊与守殿

内宮一神主

26 『氏經引付』上

○ 雖末申通候、以事次令啓候、抑藏方牢人方之公事子細、牢人以弓矢

押、可還住之由申候て、方々語勢、ハや上地まで取寄候之由承及候、然者山田三方窓劇と申、御鎮座御事候、旁以無勿跡存候、然者可然之様、以御口入、無為に還住させられ候ハ、可目出候、さ様ニ御料簡候者、忠行も同心申候て、口入可仕候、此旨、外宮一棟宜殿へも申入候、次山田三方へも申候、可然之様ニ御談合候て、可預御返事候、為其態以書状申入候之間、可得御意候、恐惶謹言
(文明十二年十二月五日)

忠行判

内宮一棟宜殿 加談合、自是返事
可申由、言にて申

愛洲伊与守

27 『大乘院寺社雜事記』 (一四九五) 明応四年十二月十二日条

○ (前略) 高柳以下被官人訴申条々、今度、朴木刑部丞、稻生兵庫助、佐々木源三左衛門尉生涯、其妻子等永可致追失事、佐々木三郎兵衛、同彦衛門事、無道仁也、可被弘御領中事、今度与同輩、自然及御沙汰跡在之者、面々蒙仰可成敗事、不然者不申承引事、以上起請文申事、

德政可行之事、棟別等被切之時、地下人与同待分事、仰不可然事、御領内檢断事ニ、罪科人事ハ無是非、其所及過錢等事、不可然云々、如此申状共也、七月十日捧之

田上小五郎 水谷藤次郎 八野八郎
方忠 方広 祐泉
佐田藤五郎 高柳刑部少輔 大宮式部少輔
方吉 方幸 勝置
日置治部少輔 山室民部少輔 沢兵部少輔
勝定 勝兼 方満

五ヶ所遠嶋尉 中御門殿
忠置 房經

28 神宮文庫藏『守朝・守則記』

○(明応五年)後二月 日 注進 致再興田宮寺事

右件田宮寺者、内宮二門祢宜祠宮等之氏寺大神宮法案・長日勤行、
自往古遂其節云々、御祈禱之寺也、然之間、先年焼失以來度々雖令
致再興存、^(愛脱)洲方掠申 神慮、依彼寺領於押領、不遂其意云々、勤行
退転云々、

29 『守晨引付』

○宇治六郷大少内人神役人等謹言上

可早預御成敗、為無事安全神領大湊事

右在所者、御裳濯、宮川兩神水之流、而瑞籬之近郷、而二所太神宮
朝夕御饌料神船勤役調進嚴重御神領也、次兩宮神家長官傍官於始申、
大少内人、在々所々撰社未社等祝諸役人等之衣食売買乃便、悉皆大
湊乃不倚助者、迷惑何事如之、殊宇治郷者異無力于他、^(ママ)諸商買以下
彼在所於不煩は、每事不可叶、爰先度愛洲殿大湊江可有御勢遣刻仁、
被仰和無事之由承及、各喜悅之處、此間可有御発向之由風聞、為事
実は、神鑑難測者哉、可然様仁、被仰有、被止御発向之儀者、神慮
快然、御神忠之瑞一、殊に者愛洲殿御祈禱之專一不可過之、仍為蒙
御成敗、神人等一同謹言上如件

(一五〇九)
永正六年七月廿日

30 『守晨引付』

○一皇太神宮神主

早可蒙御裁許大湊事

右件大湊者、自往昔異嚴重于他神領也、所以者何、兩大神宮朝夕御
膳米神船調役勤仕無懈怠之處、自愛洲方、可有発向彼在所之由風聞、
為事実者、神供闕如之基歟、神慮太以難測、然間忝奉行神明之正印、
令言上者也、尚以巨細宇治六郷神人等之載注進状具也、神訴之旨、
爭被棄捐乎、早被仰有、悉以大湊之儀、令靜謐和与者、御神忠御祈
禱何事如之、仍注進如件、以解

永正六年七月 日

祢宜 守則 十人

外宮庁宣文言同、仍不注

31 『守晨引付』

目安
○謹言上

山田三方

自愛洲殿可有大湊御発向由愁訴事

抑彼在所者、御鎮座近辺而久住者、各專役人等也、并御饌料調進舟
出入之津也、然到亡所者、必定御供可有懈怠歟、神^(歟)難此事耳也、且
者一天之凶事歟、以之早被成御嚴重御下知、令為無為者、御神忠何

事如之、爰元鉢、以内外御庁宣委御申御沙汰之条、不能述索、唯奉
憑寬有御助外無他、謹訴状趣蓋如件

(七月)
永正六曆夷則日

32 『守晨引付』

○乍恐申上候、仍就湊之義、自両宮以御庁宣被申候、并宇治当所各捧
目安候、於此上、先度内々申上候、万正御礼物之事、湊へ可申付候、
猶々御庁宣申事候、忝御神御正印被行候、併御神訴迄候、不少□義
候、偏奉憑御心得候、恐惶謹言

七月

山田

謹上 仏光寺

33 『守晨引付』

○乍恐一筆令啓候、仍今度山田緩怠言語道断候、就其雖難測御機嫌候、
以神慮之義、不顧可恐申入候、被止御鬱憤者可目出度候、不然者神
前忿劇乱入必定事、且神慮難測、且諸人難堪不可過之候、山田緩怠
を太神宮江被閣申、諸人を有御扶助者、神明之快然御祈禱何事如之、
申上愚意、預明察、有御同心者、当所老分一同、施面目之意、成喜

悦之思候、企參上具申上度候、併奉伺宜候、恐惶謹言
(永正八年)
七月四日

宇治六郷神人

五ヶ所殿
御中

34 『守晨引付』

○庁宣

可早任先例、専神役日永御願寺領内御田神米二石御筭上分事

右件本宮上分米者、御祭十六日宵曉之御神事料所、而異于他御神物
也、爰去年分雖未到一度之事者、致取替之沙汰、奉備御供者也、万
一当年有煩之儀者、十二月御祭可退転者哉、神慮太難測矣、早如先
規、遂徵納、可全神役之由、以神忠可有御成敗之状、所宣如件、以
宣

永正十年十月日

祢宜荒木田神主

当国守護愛洲方へ成之

35 『守光公記』(『大日本史料』九一五)・永正十一年八月十七日条

(雅業王) (栗真庄ニ係ワル)
伯来 (略) 北方愛洲方可入来之由申間、珍事之事、(略) 愛洲可

下人之由申、此事可為其時□□可然歟、堅□有事間、於可入
人一段曲事也、至其時可預御沙汰之由申入了、

36 「古和文書」写

○依愛洲方、手遣無比類御働之由、承候、殊御手負候由、無御心元候、猶其方替儀候者可承候、恐々謹言

(年不詳)
正月十六日

方識 (花押)

(裏)

奥左衛門四郎殿

西世古乘左衛門殿

37 「田曾北村家旧蔵文書」

○(前欠)与奪之儀、存知之上、永々不可有相違者也、為後日証状如

件

(一五五一)
天文廿年

七月五日

治部大輔
教忠 (花押)

北村勘解由左衛門尉殿

38 「田曾北村家旧蔵文書」

○ 尚々若き衆いづれへも此よし御意見候へく候、

五ヶ所治部大輔殿、はらをきらせ被申候、然ハ其方之御衆なと之儀

ニ付、自然雜説候共少茂別儀有間敷候、我等まかせおかれ、御きや
(驚天カ)うてん有間敷候、もしく何方より物言申候者、我等かたまたて被出

候ハ、玉丸之御はんをとり候て、可遣之候、恐々謹言

(年不詳) 一ノ瀬兵部大輔
二月六日 忠弘 (花押)

北村主計助殿

たそ 同 彦兵衛殿

同 弥八郎殿 同家人々

(裏) 北村□□□殿

□彦□□殿

同弥八郎殿 同家人々

一、南北朝期

(一)

「太平記」(イ)の「愛曾伊勢三郎」が伊勢愛洲氏の初見史料である。

以下、同書の各記事、史料1・2・3等は愛洲氏の史料としてつとに
有名なので、今更言及する必要もないと思われるが、蛇足を承知で一・

二ふれておく。右の史料には、愛曾伊勢三郎、伊勢守、愛洲、あいそ、

愛曾六郎左衛門尉、愛洲三郎左衛門尉宗実、守護愛洲太郎左衛門尉と

ほぼ同時期にさまざまな名前がみえる。これらの関係はどうであろう

か。まず、愛曾と愛洲とは同一とする従来の説であるが、(イ)・(ロ)・(ハ)

と(ニ)の人物は同一人物もしくは同族と考えて良く、史料1と3の「六

郎」・「太郎」はともに福大夫と同陣していることから、六と太は何

れかの写本の誤りと考えられるので、愛曾、愛洲氏は同じと考えて誤

りはないと思う。次に伊勢三郎と伊勢守とは、子と父と考えるのが妥

当と思われる、(ホ)の伊勢守はこの伊勢三郎と考えられる。もっとも文学

作品であるのでそこ迄厳密に考える必要もないとすれば、同一人物と

しても差支えないが、この場合、史料2の宗実と伊勢守・伊勢三郎と

をすべて同人物と考えるのは如何であろうか。少くとも宗実と伊勢守は別人と考えるのが自然であろう。何れにしても、史料②も検討すべき点があるうえ、史料のこのり方からみて、宗実は紀伊愛洲氏とも考えられるので、断定的な結論は控えるべきであろう。六郎左衛門尉と太郎左衛門尉とが同一人物であろうとは先述したが、この「守護」を守護と文字通り解釈するのが誤りであることは論をまたなく、この文字にひかれて伊勢守と同人物、あるいは兄弟とする説は如何であろうか。そもそも、他家ノ大名の一人として数えられ、宇都宮氏、千葉氏等錚々たる武士と肩をならべ登場する愛洲氏と、一騎駆けをし、今川氏被官と知音とする『難太平記』の愛洲氏像とは落差がある。誇張・倭少何れにしても史料の限界があり、幕府成立以前は新田義貞軍に属して転戦し、成立以降は伊勢国にあって反幕府の軍事行動をとった主だった武士団の一つに愛洲氏がいた、とするのに止めるのが妥当であろう。

(一)

延元四(暦応二)年以降、しばらく愛洲氏の動向を伝える史料を欠く。しかし田中忠三郎氏所蔵文書中の貞和四年の「外宮祢宜目安伏案」によれば、康永元(一三四二)年、親房、源少将とともに一福大夫・雅楽入道が玉丸城に籠っており、その後も貞和三〇四年、一福大夫・子息全福大夫・雅楽入道等が「悪行」を行なっていることからすれば、愛洲氏も行動をとめた可能性が大きい(愛洲氏の名前が見えぬのは、非難の矛先がもっぱら外宮神官に向けられたためであろう)。史

料④は前欠で、年不詳。塔世陣のことは他に年不詳十二月十九日付荒木田氏統の栗野又鶴大夫宛書状に「塔世陣事一昨日合戦」とみえるが年不詳(嘉元二年内宮仮殿御遷宮記紙背)。「愛洲退治」のため「宮方」になった人物も不明。しかし「神人発向」、「京都貴入」の文言と、右の「外宮祢宜目安案」にいう、貞和三〇四の親房を中心とする上洛の動きや「山田一揆衆」と符合する点があり、これから推測すれば、貞和三〇四年間に比定できるのではないか。(「南山遺芳」の編者は延元(一三三六)ノ興国(一三四六)年間としている。これが正しければ、愛洲氏の動向の一端が窺われる。

(二)

『太平記』(外)はいわゆる観応の擾乱を描いたものであるが、ここにふたたび伊勢守が登場する。しかし登場の仕方は初期とはいささか異っている。すなわち、ここでは伊勢守護石塔頼房の軍事指揮下に行動している点である。この石塔氏は翌三月、「勢州源大納言誇張以外之由風聞」^②のため追討命令をうけているが、その際、伊勢守ほどの陣営にあったであろうか。彼の動きを直接示すものではないが、愛洲氏の動向を推測できるのが史料⑤である。この史料は従来の愛洲氏研究では何故か無視されているが、醍醐寺三宝院門跡領一志郡曾祢荘の預所職に関わるもので、史料には掲げなかったが、これとは別に観応二年四月二十六日付の源幸松丸請文がある。ここで注意されるのは、(イ)北朝の年号を使用している事、(ロ)「右衛門権少尉」時房と官途・実名・花押がわかる初見例である事、(ハ)愛洲氏と具体的地域との関係を知る最初の例である事、その他、(ニ)源幸松丸との関係、(ホ)三宝院と愛洲氏との関係等々であろう。(イ)については、伊勢守とこの時房は別

人ではあるが、親房に属さず、守護石塔氏指揮下にあった事を示唆している（ただし石塔氏が直義派であったという複雑さはあるが）。

(ロ)の右衛門権少尉という官職からすれば、時房を嫡流とすれば愛洲氏は必ずしも伊勢において他の武士に卓越した存在とはいえないのではないか。

ところで、曾祢荘は、鎌倉期にあっては公文職は橘氏が相伝し、預所には僧官が補任されている^③。南北朝には、公文職に橘範明が補任（建武五年）、改替、再補任（暦応三年）さらに貞和二年には百姓請が行われるなど支配に動揺を来しており、それだけに預所職に時房の口入により源幸松丸を補任した背景には三宝院の彼等に対する大きな期待があったと思われる。さて(ハ)は後掲史料とともに検討するとしてこれと関連して(ニ)・(ホ)はどうか。残念ながら、これらについては不明であるが幸松丸については推測を加える材料がある。『元亨三年内宮仮殿遷宮記』紙背文書中に、飯高郡岸江御厨につき「山門兒童幸松丸」の訴えにつき、祭主隆実に尋沙汰するよう命じた後醍醐天皇綸旨がある。ここにみえる幸松丸と先の幸松丸とは同一人物または父子でないかと考えるのである。両史料は約三十年隔たっているが、岸江御厨（松阪市）と曾祢荘の位置関係からいって可能性は高いと思われる。この推測が許されるとすれば、愛洲氏は山門勢力と一定の関係を持っていたことになる。

四

史料6は外宮祢宜某が、守護仁木義長に押領された所領を注進したものであるが、これによれば、かつて丹河御厨が、現在は苦木御園が

愛洲氏に押領されている。丹河御厨は、抜川河口部に位置し、近世の養田丹川村に比定されている。関連史料は少なく、『建内記』正長元年十月二十二日条には岡崎範兼領とみえる。苦木御園は飯高町上・下仁柿に比定され大和・南伊勢を結ぶ伊勢本街道の要衝に位置する。後の史料になるが、応永十年の醍醐寺報恩院隆源の『枝葉抄』^④には（ニカ）ミカキノ里 伊勢国司管領とあり、北畠氏支配下に入っている。曾祢荘・丹河御厨・苦木御園とほぼ同時期にあらわれるこの三ヶ所は地域的には隔っており、愛洲氏の根拠地がどこにあったのかこの時点で推測するのは困難である。なおこの史料にみえる五ヶ氏については後に検討する。

二、室町時代

(一)

史料7・10について検討する。まず8・9・10の年代比定を行ないたい。8は漠然と南北朝期のもので考えられているが（例えば『南山遺芳』）、「鹿園院殿御判」という文言や、その内容からみて、「御判」がまさしく史料7を指している事は明らかである。従って応永六年四月以降の近い時期とする事ができる。史料9がやはり応永六年前後のものである事は別稿でふれたので省き、史料10はどうか。差出者も宛所もないが、これも史料7・8とほぼその内容が一致しており、この当時のものと考えて差障りがなからう。^⑥（なお、宛先は北畠氏、もしくはその奉行人と考えられる。）以上を確認の上、次に進みたい。愛洲一族・神人士一揆が押領した「河田散在」は、「釈尊寺手継案」

所収の文書によれば、多気郡大国・坂倉郷（多気町）、^{（湯力）}抽田（不明）

に散在しており、古利寺領は「法楽寺文書紛失記」では度会郡内城田郷内下小河村、南迫（一名田摩）にあり、現在の度会町田間周辺にあたる。棚橋とその距離は近い。両所は、後述する五ヶ所氏知行地野篠郷から前者は北西約五キロ、後者は岩出を経て宮川沿に約十キロと近い距離にある。縄主戸・草庭・矢瀬は残念ながら不明であるが、ここに内瀬が登場するのが注目される。愛洲氏居城、同氏館と伝える五ヶ所浦と近接しているばかりか、愛洲氏と海との関係を示唆するこの時期唯一の史料であるからである。

次に史料9にみえる「五ヶ瀬」氏であるが、これは中世古氏の指摘のごとく、瀬Ⅱ所Ⅱせと読み、五ヶ所氏であり、しかも史料7からこの五ヶ所氏が愛洲氏もしくはその一族であると考えて誤りはないであろう。この時期、愛洲氏が山田神人一揆（神人が山田神人であることは、「釈尊寺手継案」に常光寺領、山田神人押領とある）と行動を同じくしていた事実は後の山田との関係から考えて興味深い。

（二）

ここでは、先に保留した五ヶ氏について検討したい。五ヶ氏と五ヶ所氏は名前が類似するばかりか、両者の活動地域も重複するため混同される場合が多い。筆者も両者の違いに深く注意せず混同していたが、中世古氏の説くごとく、両者は異なると考えるのが正しい。以下五ヶ氏について述べる。史料6の記載の仕方からみて、愛洲氏と五ヶ氏は異なることが十分予測されるが、それはさておき、瀧野は飯高町上・

下瀧野に比定され、櫛田川上流に位置し、和歌山街道が通る。暦応二年の「醍醐寺所司等申状案」には瀧野地頭として長生中務丞がみえるので、^⑩新地頭五ヶ氏はその跡を襲った可能性が大きい。次に五ヶ氏関係史料として史料11・12・14・19・22がある。11にみえる三瀬氏は『氏経引付』上所収、文明九年九月二十四日付、三瀬宛氏経書状、九月二十六日付三瀬綱実書状にみえる三瀬と同じで、これによれば神宮支配下にあった宮川渡舟の奉行とあり、三瀬（大台町上・下三瀬）の在地領主で一定の政治力を有していたと思われる。史料14の池村御園は明和町池村に比定される。史料19以下は一連のもので、内宮領菊御園に関わるもの。当御園は『皇太神宮年中行事』には九月九日節供に菊花を貢進する御園とみえるが、残念ながら所在地は不明である。参考史料a・bの五ヶ氏代官渡状にみえる「たのい」が「たぬい」Ⅱ田辺とすれば、菊御園は田辺周辺に存在したことになる。当時、五ヶ氏はこの地域を支配下においていたことがわかる。19・20から応仁元年、ふたたび当御園を押領したことが知られるが、注目すべきは、21・22では、五ヶ氏が「背上意」き、「其身」を失なったとあることである。この史料以降、「五ヶ」氏の史料はみえなく、滅亡した可能性が強い。この点、『氏経引付』、『氏経神事記』にはほぼ同時期にあらわれる「五ヶ所」氏が、後々に姿みえること、しかも、五ヶと五ヶ所は右書でみる限り載然と区別して記載されていることから両者は別族と考えてよいのではないか。では五ヶ氏の本拠地はどこに求められるのであろうか。この点、次の史料にみえる「五ヶ城」の比定地をどこに求めるかに関

わってくる。

発向五ヶ城之間、合戦最中也、早卒一族可被拔軍忠之状如件

康永二年三月廿一日 (仁木義長)
右馬權助(花押)

大相右馬允殿^⑫

この五ヶ城は中世古氏の指摘のごとく、五ヶ所に求めるべきでなく、多氣郡勢和村古江にあり、後、五ヶ笹山城と呼ばれた地に比定すべきであろう。^⑬ 康永二年三月当時の戦況は不詳であるが、前年八月の玉丸城陥落、ついで九月の坂内城陥落により南朝軍はより奥地に退却したと思われる。古江は伊勢本街道、和歌山街道の双方を扼す位置にあり、まさしく軍事上の要衝である。このようにみれば、遠く大杉氏に軍勢催促したのも地理的に納得できよう。^⑭ しかも、瀧野以下関係した地域は、五ヶ(古江)を中心にはばその周辺に位置しており、この点からも、五ヶ氏の行動を説明できる。

以上、本論から大きく離れたが五ヶ氏は古江五ヶ城を本拠とした在地領主であり、五ヶ所とは別族であることを述べて来た。

(三)

本論に戻ろう。史料13は約半世紀ぶりの愛洲氏関係史料であり、確實な所領を示す殆ど唯一といつてよいものである。野篠郷は玉城町のほぼ中央部にあり、玉丸・田宮寺と近接する。倭名抄郷城田郷に属し、南北朝以後は外城田郷に属した。『皇太神宮年中行事』では四月初午氏神祭に「馬草」を貢進する地であった(但しこの箇所は氏経の追筆である)。^⑮ この時の庁宣は残っていないのでその内容は不明であるが、

押領に関わる事であったのであろう。この「給主」が北畠氏の補任に関わるものであったのか、神宮(内宮)であったのか俄かに断定できないが、後者の可能性が大きい。『道後政所職事』では永享十一年九月二日付で「外城田郷 除狩田 代官職」が一称宜氏貫によって今大路図書助に補任されていることがみえ、また十二年正月には野篠が「駒口」を政所に持参しており、野篠が所在した外城田郷一円が内宮(政所)の直轄地であった事が確認される。しかるに『氏経神事記』宝徳二年十二月十七日条には当地への北畠氏の大規模な軍事行動を伝え「抑今度御陣者、依致緩怠、去月廿九日、原・山神・野篠・荻田辺(以上玉城町)被焼、今月三日、上路・中洲・懸橋辺(以上伊勢市)ヲ被焼、七日小俣ヲ被焼、而山田合力間、山田ヲモ可有沙汰、残三ヶ郷浜辺、為可有沙汰御在陣」とみえている。これら焼払の対象となった地域では郷村制が最も発達をみた地であることは西山克氏の論稿に委しく、^⑯ ここでは省くが、右のような在地勢力の徹底した弾圧を通してのみ、北畠氏の支配が確立していったものと思われる。以上のことから、五ヶ所氏の給主補任の時期は少くとも永享十二年以降のことであり、とくに宝徳二年の北畠氏による当地域の軍事的制圧を契機にしているのではないかと考えられる。その際、五ヶ所氏の給主補任は北畠氏の口入によって内宮が行った、合法的手段による野篠郷支配であったと思われる。史料15・16は引き続き五ヶ所氏がその地位にとどまっていることを示すとともに、「三河守忠氏」と官途・実名が知られる史料である。ちなみに、五ヶ所氏が出陣したこの出兵は、十月末に行なわれ、^⑰ 『氏経神事記』十一月四日条には「楠田、井上等背国方、為被静彼等、

坂内殿、岩内殿為大将、有爾・玉丸辺に被在陣」れたのであったが、
兩人の没落後も、『氏経引付』五所収、十一月二十二日付坂内具能書
状によれば、「山田者ども、……悉あたりはうくわ仕候……山田地下
人ともくわんたい、諸軍勢取乱候て里々ほふ所ニ成候」とあるごとく、
山田と北畠氏の抗争が行なわれ、『氏経神事記』十二月二十一日条に
は関氏・一色氏守護代石河氏の出陣もみられ、諸軍勢取り乱れが誇張
でなかったことが窺われる。同書二十四日条に「国方軍勢被引陣」と
あるが、この間、「神役田祭主分附領、祢宜已下諸別宮役人等職田、
……称当御陣米、可有御所務之由、近日被相触仰¹⁹」られており、田宮
寺領も例外でなく、「田宮寺の事も御めんと候へとも、方々給主寺領
をわつらされ候。……兵糧ニなさるへきにて候²⁰」といった状態であっ
た。史料15・16は右のような情況下、五ヶ所氏に寺領の保全をうった
えたものである。

四

史料17・18は七ヶ御園に対する押領を伝えるもの。七ヶ御園は『氏
経引付』・『氏経神事記』あるいは『内宮年中神役下行記』に頻出す
るが、田口を本郷とし、野副・野原・椋原・打見・神原・楠等の諸村
を総称したものであり、いずれも宮川中流域に位置し、大台町・大宮
町に属する。この御園は六・九・十二月の各二十二日瀧原宮祭に下向
する官幣使、祢宜に対する人夫・幣使米を負担する内宮を本所とする
御園であるが、各郷は、たとえば田口は御台料所、野原は祢宜経満よ
り永享十年氏経が「領家」となって年貢・公事を収取しているごとく、

祢宜・政所等の所領化している。『氏経神事記』宝徳四年六月二十二
日条、九月二十二日条には「当時七ヶ御園、自国方進退」、「七ヶ御
園自国方依違乱」と、この頃すでに北畠氏勢力の浸透をみており、自
筆本『氏経引付』三所収、長禄二（一四五八）年十二月二日、翌三年
十月二十一日の内宮神主解には、北畠被官人古江彦右衛門が野原郷奉
行人を勤めていることが知られる。²¹従って五ヶ所氏の「押領」・「知
行」の事実は余りその時期を遡ることはないであろう。またこの知行
がいつ迄続いたかは不明である。²²

三、戦国期

(一)

史料23・24は氏神役田をめぐる氏経と愛洲氏の応酬。ここにみえる
愛洲伊与守忠行は先述の五ヶ所三河守忠氏の子息と思われる。山神東
漸（泉）坊の相論をめぐって没収されたとされる氏神役田は山神郷に
所在したのであるう。いずれにしても愛洲氏は山神郷に対し裁判権を
有していたこと、すなわち野篠に加えて山神をもその知行地に収めて
いたことが知られる。史料25は矢野郷内供僧田没収に関するものであ
り、これを加えると愛洲氏は、野篠・山神・矢野といった玉城町中心
部をこの当時所領としていたことになり、少くともこの地域が愛洲氏
の重要な根拠地となっていたことは明らかなことであろう。史料28か
らは明応五年当時も愛洲氏が引き続きこの地域で勢力を有していたこ
とが確認される。愛洲氏が玉丸城に居城したか否かは不明であるが、
後世、玉丸氏と愛洲氏とが混同される素地は十分あったといえよう。²³

(二)

史料26は、蔵方牢人と山田三方との紛争に対し、忠行が蔵方牢人の山田還住を「口入」したものの。この事件については関連史料がなく、詳細は不明としなければならない。また蔵方とは土倉・高利貸を指すものであるが山田内部における分裂抗争を伝えるとともに蔵方と愛洲氏との関係をも伝えるものとして興味を引く。愛洲氏が山田進出のきっかけを作ろうとした試みとでもいえようか。

史料27は、北畠家臣団の分裂抗争を伝えるもので、この後、高柳氏以下は逸方弟木造師茂、逸方子息馬助を擁立して反乱を配しており、北畠氏の権力構造を分析する上で、欠かせない史料である。ここにみえる重臣中の「五ヶ所遠嶋尉忠置」は忠氏の子息であろうか。この忠置が明応六年、「高柳・大宮以下数十人没落衆」²⁵に含まれていたのか否か、興味ある点であるがこれも不明である。

(三)

史料29～32は愛洲氏の大湊発向に関わるもので、すでに徳田鋸一氏がその著『中世における水運の発達』にふれられ、著名な史料である。29からは、これ以前に一度愛洲氏発向の動きがあったことが知られるが、以上の史料からでは、発向の原因となった事由、何故発向の主体者が愛洲氏であったのかという疑問は解決しない。ここで想起されるのは、これも著名な事件である永正八年の長野氏の桑名発向である。

この両事件を結び付ける史料は何もないが、果して両者の行動は無関係に行なわれたものであろうか。これを検討する前に、先ず史料34・

35をみてみよう。34にみえる「守護」愛洲氏は永正五年伊勢北方守護に補任された北畠氏の守護代であることは別に述べたことであるのでここでは省く。²⁶35について。永正十年九月、奄芸郡栗真庄において北畠・長野氏が会戦、長野氏の大敗に終わったが、その後も同庄をめぐり両者の対立抗争が続き、宮中でその対策に苦慮している様子は「守光公記」に委しい。²⁷そのような状況下35は愛洲氏の同荘入部の動きに対しこれを阻止するため使者の派遣を協議したもの。愛洲氏の守護代就任の時期は不明であるが、北畠氏の守護補任とほぼ同時と考えてよいであろう。『内宮愍忌年代記』九年九月十四日に「国司北方守護代入国、愛洲殿」とあり、同氏が北方に入部したことが知られる。先の長野氏と戦った主力は愛洲氏であつたと思われ、その後も北方に陣したことを史料34・35は語っている。

さて、以上の事実を踏まえて、先の大湊発向事件に戻ろう。このようにみると愛洲氏の行動が守護代として北方入部という軍事行動と深く関係していたと推測するのはあながち突飛な想像といえないのではないか。おそらく、水夫・船舶の徴発、それに対する大湊の拒否が「発向」の原因ではなかったか。史料33の山田発向の原因も不明であるが、戦費調達等をめぐるものであつたと思われる。長野氏の発向も、愛洲氏入部の動きに対する伊勢海制海権の掌握、もしくは南方への物資輸送の遮断という目的からなされたのではないか。もっとも先述したごとく両者を結び付ける直接史料はなく、あくまで以上は推測にすぎないが。

史料36は現存の「古和文書」には欠失しているが、近世の書き上げ

中にみられるもの。年代も、「方識」なる人物も不詳であるが、北畠具方の「方」の一字を名乗ったとすれば明応～永正年間の頃の人物と考えられる。いずれにしても、愛洲氏と古和浦の在地領主との関係が知られる貴重なものである。もっとも彼等在地領主と被官関係を結んでいたのではなく、水軍として徴集された彼等が愛洲氏軍事指揮下に臨時的に編成されたものであり、被官関係は「方識」との間に結ばれていたと考えるのが妥当であろう。この愛洲氏の軍事行動がどこで行われたかは不明であるが、憶測をたくましくすれば、先の北方入部であったかもしれない。

四

史料としてはあげなかったが、『田宮寺旧記』天文六年に「愛洲彈正忠親忠」なる人物がみえ、この人物は「竈方文書」²⁸の次の史料

再借物者可為相々之事

分領中山之事、任先御代御判之旨、不可有相違者也、并所務之事は可為如前々、仍如件

永正十八^{辛巳}年五月廿六日 親忠（花押）

五竈

老分中

とある親忠と同一人物、また「中嶋軍記」²⁹の

於今日和具口之合戦、被鎗疵数ヶ所、粉骨、忠節無比類候、神妙至

感心此時候、恐々謹言

（一五二九）
享祿二年八月十三日 彈正少弼親忠判

北弥三郎殿

さらに天文二年の「賛村文書」の彈正忠親忠も同人物であろう。史料として検討を要する点もあるが、以上から、愛洲氏が一貫して野篠郷周辺地域の所領を維持していたことが確認されるが、何よりも、「五竈」所在地、海辺を広く支配下においていたことが知られ、「五ヶ所浦」城主に房わしい姿をここに初めて見出すことであろう。和具口（志摩町和具）の戦いも詳細はわからぬが五ヶ所城主と考えてはじめて理解できる。なおここにみえる親忠は³⁰でふれた愛洲氏と同一人物、もしくはその子息にあたるのであろうか。

史料37の「治部大輔教忠」と38、「五ヶ所治部大輔」とは同一人物で、おそらく親忠の子息、あるいは孫にあたるものと思われる。これらによれば愛洲氏は田曾浦を本拠とする北村氏一族を被官化していたことが知られ、その権力構造の一端を窺える貴重なものである。この北村氏については「田曾文書」中に、麻布に記された次のような史料があり、

大崎関³⁰

田曾宿此方申合候之間、於諸関別儀有間敷仍状如件

梶原与次

（一五七四）
天正二年十一月吉日（黒印） ○印文不明

衛

と、北村一族が海上交通に従っていたことが知られる。愛洲氏は北村氏のごとく、同族結合を中核とし周辺の在地領主をも含んだ、いわば「田曾浦衆」ともいうべき在地領主連合を掌握し、水軍として編成し

ていったものと考えられる。

史料38は教忠の切腹を伝え、これによって愛洲氏は滅亡したとされる。この後、北村一族は一ノ瀬忠弘を媒介として玉丸氏の支配下に組み込まれている。この史料の年代比定が問題になるが、「竈方文書」中にみえる元龜二（一五七一）年七月四日付の五竈中にあてた安堵状の署名者「忠弘」と右の一ノ瀬氏とは同人物と思われることから、年代はこの前後と考えてよいだろう。さらに「田曾文書」に

「助左衛門跡職浦口弥之助仁被成御扶持候并藤八跡職北村勘解由左衛門仁被成御扶持候、永代不可有相違候、猶船瀬石見守、林左馬亮門人被仰聞候、恐々謹言

天正三
亥

十一月廿八日 鶴松黒印 ○印文不明

北村勘解由左衛門尉殿

浦口弥助殿

警固代官之儀、委細被申候、前々之任筋目（カ）從罷立下候、船之儀無別儀被返置候上者、不可有相違候、猶舟石、林左被仰聞候也、謹言
天正四

七月三日 鶴松黒印

北村宮内承殿

のごとき文書があり、天正三年以前田曾浦の支配は鶴松なる者に移っていることが知られる。以上から教忠の死は天正三年頃に求められる。彼の死、あるいは愛洲氏滅亡の原因は織田氏による北畠氏権力構造の

解体、再編成過程の一環として位置付けられようが、詳細は不明としなければならぬ。なお、先の鶴松なる人物であるが、教忠子息の可能性も考えられるが、「竈方文書」中、天正十一年、玉丸中務直息安堵状、「田曾文書」中の同年十二月廿四日付の玉丸中務直息の「多曾鉄炮之者」宛、充行状の存在から考えると、この直息の幼名と思われるのであつて史料38の「玉丸」もこの鶴松を指すのであろう。^⑤

おわりに

以上、断片的史料によって愛洲氏像を構成しようと作業をして来たが、ついに断片的像に終ってしまい、その実像とは程遠いものとなつてしまった。史料の前半は内陸部での愛洲氏、戦国末期においては海辺部のそれと、史料の残存の仕方の問題とはいえ、二つの愛洲氏像を統一的に把握できなかったのが残念であるが、今後の課題として筆をおきたい。

註

- ① この当時、石塔氏が守護であつたことは佐藤進一『室町幕府守護制度の研究』上を参照。
- ② 『園太暦』観応二年三月三日条。
- ③ 当荘については『角川地名大辞典 24三重県』の曾祢荘の項を参照。
- ④ 『大日本史料』七編六所収。
- ⑤ 拙稿「九鬼氏について」（『三重県史研究』創刊号所収）。

⑥ 『醍醐寺文書』（東大史料編纂所写真版）には応永五年閏四月二十三日付の義満御教書があり、それに法楽寺の興行沙汰、寺領の沙汰付を北畠氏に命じており、三宝院の寺領回復運動は応永五年頃から行なわれていた。

⑦ 『醍醐寺文書』八二一号「法楽寺領拝領人数注文」に 職田 半分 矢瀬勘解由左衛門尉 とある。この矢瀬氏と関係した地であろう。

⑧ 内瀬については『日本塩業大系』史料編 古代・中世〔所収の「永仁五年仮殿遷宮記」紙背文書の解題に、山門僧静真と神宮、釈尊寺の相論を中心に委しくのべられている。また『内宮年中神役下行記』には四月十四日御笠神事の際、御笠首を所進する地としてみえてゐる。

⑨ 愛洲氏館跡、城跡については、三重県教育委員会編『三重の中世城館』を参照。

⑩ この文書については拙稿「曾祢庄と平信兼」（『日本史研究』二三四号所収）を参照。

⑪ 『氏経神事記』同年九月二十日条に三瀬氏と内宮祢宜の紛争がのべられている。なお、「古和文書」に永正年間と思われる北畠氏奉行人山室方兼奉書に「態野御用脚」に関し「路次之儀」を三瀬氏に申し付けている文書があり、三瀬氏が当地において引き続き勢力を維持していたことが窺える。

⑫ 「津田文書」（『大日本史料』六編九）

⑬ 前掲『三重の中世城館』参照。

⑭ 鈴鹿郡関町、波多野貞雄氏所蔵文書、この文書については別稿で

紹介する予定。

⑮ 「津田文書」には玉丸城の攻略にあたって義長・南朝沙弥某がともに軍勢催促を行なっているのも参考になるう。

⑯ 『氏経神事記』永享十年四月六日条に、当地から「馬ニ蒿ヲ飼、自野篠郷、霜月ハ稻ニワ」とある。

⑰ 西山克「伊勢神三郡政所と検断」上・下（『日本史研究』一八二、一八三号所収）。

⑱ この出兵に関連した史料は自筆本『氏経引付』五、『氏経神事記』にみられるが、寛正五年十月二十日付、造宮使宛智積寺能弘書状には「只今出陣にとりむかい候間」とある。

⑲ 自筆本『氏経引付』五所収、十一月付内宮庁宣

⑳ 右同書所収、十一月二十六日付藤波氏宛氏経書状

㉑ ここにみえる古江氏は古江を名字の地とする者であろうか。とすれば五ヶ氏の一族とも考えられる。

㉒ 五ヶ所氏の押領がいつまで続いたのかは、『内宮年中神役下行記』の成立年代に関わるが、これについては安江和宣氏の文明三年から八年迄とする説に従っておきたい（安江和宣「『氏経卿神事記』における「下行」の問題」、『皇学館大学「神道研究所紀要」創刊号所収』）。なお、関については、『氏経神事記』文明十一年九月二十二日条に「瀧原不参、件事因方へ庁宣、宮原方ニ送」とあり、十二年九月十八日条には、北畠政勝の「幣便通路之儀如先規、諸関渡不可有相違……巨細宮原大和守申付候」との書状が収められ、この注に「宮原可警固由也」と通路警固を宮原大和守が行っておりさらに

十三年九月二十二日条にも、「宮原ハ御出陣御共、仍代官於関等成敗」とある。この宮原氏は路次警固のみでなく、七ヶ御園を愛洲氏に代って支配したのではなからうか。

- ②③ 玉丸氏、愛洲氏との混同については、中世古氏前掲書が委しく批判されているので参照されたい。

- ②④ この史料については、西山克「戦国大名北畠氏の権力構造」(『史林』六二巻二号所収)がふれられている。なおこの内乱に関しては、『大乘院寺社雑事記』明応六年三月四日、四月十日、五月二十一日、八月二十日、九月十一日、同八年一月二十五日、十一月四日条など関連記事がある。六年八月二十日条には沢氏の自害を、八年一月二十五日条には大宮氏が「去年色々侘事申、子息出仕、親ハ隠居分也」とある。

- ②⑤ 『大乘院寺社雑事記』明応六年三月四日条。

- ②⑥ 拙稿「室町期伊勢国守護考」(岸俊男教授退官記念会編『日本政治社会史研究』下所収)。

- ②⑦ これに関する史料は拙稿「伊勢国国人長野氏関係史料下」(『三重大学教育学部研究紀要』三六巻所収)にあげておいた。

- ②⑧ 「竈方文書」は検討を要する文書であるが、筆者は原史料を未見のため、中世古氏の所説に従っておきたい。

- ②⑨ 西垣晴次「神境合戦類聚 追補(3)」(『群馬大学教育学部紀要』二九巻所収)に所収。

- ③⑩ 大崎は不明であるが、浜島町大崎にあたるか。

- ③⑪ 戦国末期の伊勢・志摩の政治状況には不明な点が多い。「沢氏古

文書」六一・26・27に次のような文書がある(『松阪市史』古代・中世史料編所収)。

崎嶋へ為番替、其之人数去十二日仁可被立置之由申候処、……不令在陣罷帰之由……去十八日仁切原迄着陣而、嶋へ不罷越之由注進候、……不移時日可被立置候、……(後略)

(永禄六年)
壬十二月廿五日

(具房)
(花押)

就舟越番之儀委細承候、存知申候、雖然彼城非可被開儀候間、一番之儀急度可被申付候(後略)

後十二月廿八日

(具房)
(花押)

沢源六郎とのへ

と永禄六(一五六三)年、北畠氏が志摩半島へ軍事行動を行なっているが、ここに見える切原・舟越は五ヶ所浦を背後から扼す位置にあり、これを以って愛洲氏への軍事行動とはいえないもの迄も、何らかの牽制がその目的であったのではないかと推測される。

(本稿は西川洋教授を代表とする人文学部特定研究「三重県地域歴史史資料に関する総合調査」の成果の一部である。)

